

□木村陽二郎：ナチュラリストの系譜 近代生物学の成立史（中公新書 680）240 pp. 1983. 中央公論社，東京。¥ 480. 本書の主な内容は科学雑誌「自然」にシリーズ「自然誌をめぐる人々」として連載されていた。また、「パリ自然誌博物館再訪」という本書に関連の深い記事も同誌（1976年3月号）に載っていた。いずれ一書にまとまるのではないかと期待していた本である。著者は東大を退官後、「日本自然誌の成立」（1974）、「シーボルトと日本の植物」（1981）など、植物分類学者として暖かい目を持って、同学の先人と彼等の思想・業績とを今日の学問につなぐ好著を発表してきた。本書では今日のフランス国立自然誌博物館 Muséum National d'Histoire Naturelle において活躍し、世界の自然誌研究の発展のために貢献したナチュラリストを中心として紹介している。彼等の研究の中に一つの歴史的な流れを見つけだし、それが今日の生物学の基礎を築いたと著者はとらえている。まず、1640年パリの王立植物園の一般公開に至るまでをギリシャ時代、ルネッサンス、パドヴァ植物園の設立（1545年）、王立植物園初代園長ブロスなどについて述べながら、簡潔にまとめている。次いで、ツルヌフォール、ビュフォン、同園を訪れたこともあり、関連の深いリンネ、リンネを尊敬し、植物を研究し、植物学に貢献したジャン・ジャック・ルソー（彼の標本は自然誌博物館にも保存されている）、ジュシュー一族、アダンソン、ラマルク、キュヴィエ、ジョフロア・サンチレル、ド・カンドルなど、それぞれの時代に大いに活躍して偉大な業績を残した人々を活写している。なにかんづく、ラマルクについてはよく書いており、著者に次にはラマルク伝をまとめてほしいような気もする。締めくくりとしてその後の分類体系の発展について述べ、最後に著者の最新の植物分類体系とそのフィロソフィーとをまとめている。近代生物学は自然誌研究から生れ、今日多方面に向って大きく発展しつつあるが、母体である自然誌も今日の生物学の一分野としてなお発展を続けており、フランスではこの自然誌博物館を中心として研究が進んでいる。しかし、日本では生物学の原点ともいべき自然誌に結びついた分野の基礎が確立しておらず、不安定なところがある。著者はフランス国立自然誌博物館のような学術機関としての植物園・動物園・自然誌博物館を日本に育てたいと願っている。「自然」に載っていた時には毎回楽しみに読んでいたが、まとまってみて一気に読み終えた。本書は既に朝日新聞と読売新聞の書評欄で大きく取り上げられて、良書としての高い評価を受けている。私もこの評価が当然であると思う。著者の長い研究に裏うちされて内容は正確であり、類書を知らない。文章も読みやすい。あえてコメントすれば、現在の生物分類学はナチュラル・ヒストリーを土台とするが、そのものではないことで、後者の今日的意義を強調して、かつそれとの区別を述べる必要があるのではなからうか。リンネの *Species Plantarum* や *Genera Plantarum* が植物種誌、植物属誌と訳されているが、これまでのように植物の種、植物の属のままでよいのではと思う。ナチュラル・ヒストリーに興味のある人ばかりでなく、広く生物学に関心ある人々に推薦したい。

（大橋広好）